

## 143年の歴史を刻む 私立医科大 未来の医療を変えていく

1876年創立の私立医学校・済生学舎を前身とし、140年を超える歴史を刻み、今までに1万人以上の医師を輩出してきた日本医科大学。黄熱病の研究で知られる野口英世や、ドイツでチフス治療に奔走した肥沼信次をはじめ、数多くの医師を輩出してきた。「済生救民」(貧しく病で苦しむ人々を救う)を建学の精神に、そして「克己殉公」(己に克ち、広く人々のために尽くす)を学是とした礎は、今も連綿と受け継がれている。

「卒業生の評判としては、『バランスの取れた医師が多い』との声をよく聞きます」と顔をほころばせるのは、学長・弦間昭彦氏だ。「それはつまり、優れた医療知識・技術を有するとともに、迅速な判断力や、患者の心を理解しようとする姿勢を兼ね備えている医師が多いということ。まさしく、卒業生が学是の『克己殉公』を体現している証左だと考えています」。

加えて、建学の精神である「済生救民」を象徴するものの一つが、付属病院救命救急センターだ。1994年に全国で初めて「高度救命救急センター」の指定を受け、日々の救急医療はもちろん、ドクターヘリの運用、DMAT(災害派遣医療チーム)派遣などでも貢献する。現場の最前線に立つ医師たちの姿はメディアでも取り上げられ、広く知られるようになった。

そんな日本医科大学が今、教育のあり方を、そして未来の医療を変えるべく、新たな試みを行っているという。

「もともと本学は、勉学だけでなく幅広い教養と視野を身に付けることを重要視してきました。この自由な校風を生かして、進めているのがeラーニングの充実です。学外や、場合によっては海外でさまざまな経験を積みながら、もちろん勉学も十分に身に付けられる。そう考えて、システムを構築しました」(弦間氏)

このeラーニングは、学生たちが能動的に学ぶ環境を整える、未来型医学教育の一環だ。例えば予習・復習をサポートする学修支援システムほか、大型電子黒板を活用。デバイスに授業内容の履歴が残るため学生が復習しやすくなったり、ほかの学生によるグループ学習の内容も閲覧できるなどのメリットがある。また教員にとっても、学生によってまちまちな学習深度を一覧できたりと利便性が高いという。また臨床実習においても、メインの電子カルテとは別に、学生が診療記録を自由に記載できる学生用電子カルテを導入し実践的な教育に努めている。

### 未来を担う医師には 医療以外の知識も必須

こうした取り組みは、国際的な動きに連動したものだ。弦間氏は語る。「2023年には、国際認証基準による評価認証を受けた医学部・医科大学

「武蔵小杉は都市開発が盛んで、国内では珍しく出生率が上昇している地域です。その一方、多摩永山では高齢化の中でより充実した医療が求められている。いずれの院も、学生にとって多角的な視点から学びを得られる場所だと考えています」(弦間氏)

### 幅広く学生を受け入れるため 入試制度を大きく改革

さらに同大では、豊かな倫理性や人間性を持つ多様な医師を育成しようとして、入試改革にも着手している。17年度から入試を前・後期に分割、加え

を卒業していなければ、アメリカの医師国家試験の受験資格を得られなくなります。本学はすでに認証されており、それに対応したカリキュラムで講義を行っています。ICTを活用し、グローバルスタンダードの要件を満たす実践的な、そして未来型の教育を進めています」。

東京理科大学や早稲田大学など8大



eラーニングが充実している日本医科大学。50台もの大型電子黒板を活用

# 日本医科大学が取り組む AI時代の 医師教育

日本医科大学

143年の歴史を刻む

私立医科大学、日本医科大学。

自由で柔軟な校風はもちろん、救命救急センターを象徴とする、先端的な取り組みで知られる。

AIやロボット、

ビッグデータを軸とした新たな

デジタルテクノロジー時代の到来に合わせて、

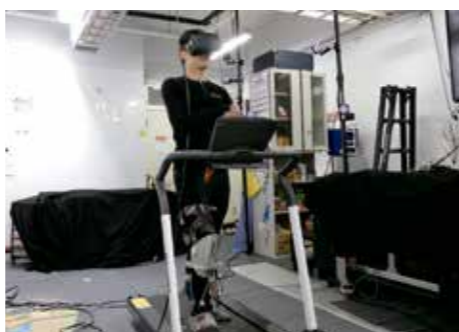
近年では未来型医学教育の導入や

入試改革を推し進めているという。

同校の学長・弦間昭彦氏に話を聞いた。

制作：東洋経済企画広告制作チーム

特徴的な取り組みだ。学生を優れた医師に育てるべく、医学とはまったく異なる理工学系の素養をつけさせる狙いだという。「中でも好評なのは『研究配属』という制度。医学部のカリキュラムの中で他大学の研究室に所属し、バイオ、ロボット関連の研究を体験できます。最先端のテクノロジーを吸収することが、学生の知見を深め、視野を広げる一助になると考えています」と、



東京理科大での研究配属の様子

て19年度より後期試験に「大学入試センター試験(国語)併用」を新設した。これは通常の後期試験で要する3教科4科目に加えて、センター試験の国語の点数を加味するというもの。従来通りの前・後期試験に加えて、3タイプの受験が可能になった。

また、初年度の授業料が免除される特待生枠を約3倍に拡大。さらに18年度からは、学納金についても大幅な引き下げを実施した。一般入学者の場合、6年間で合計570万円減、初年度で95万円減(入学金含む)となる。いずれも、幅広い学生を集めるための施策だと弦間氏は力強く語る。

「学納金の引き下げに踏み切ったのも、意欲、能力、適性を兼ね備えた学生を積極的に受け入れたいと考えたからです。医師国家試験の難易度が高まりつつある状況で、より学力の高い学生が求められる一方、意欲や適性といった部分にもしっかりと目を向けなければなりません。学力が高いからといって医学部に入学した学生が、その後挫折してしまうケースも少なくなっているのが現状です。やはり、医師になって患者の命を救いたい。そうした志を何より強く持つ学生に、本学を受験してほしいと願っています」(弦間氏)

教育コンテンツにデジタルテクノロジーを率先して取り込み、積極的に改革を行っている日本医科大学。これからも、多くの優れた医師たちがここから巣立っていくことだろう。



日本医科大学  
学長

弦間昭彦